

財団だより

第131号

2011.9

多摩川



上河原堰案内



Photo & Text
遠藤 顕彦 (Hidehiko Endo)
渋谷区在住

上河原堰

京王線の調布をおりて、京王バス多摩川住宅西行きで日活撮影所前まで。そこは多摩川の左岸。染地を経て河原を歩いて行くと上河原堰をバックにした多摩川の流れが目に入って来る。多摩川の流れと上河原堰を近くに見るならば此处がお勧め・・・

又、右岸をのぼるならば、調布から京王相模原線にて京王稲田堤へそこから歩くも好し、JR南武線に乗換えて中野島から徒歩10分程で上河原堰に。そこには静かな水面が広がりダイナミックな堰と美しく調和して雄大な自然の恵みを感じられる景色です。

ボートあそびを楽しむ人々、晩秋ともなればカモの群れが大挙して飛来し此の地で冬を過すとのことです。

Contents 目次

■ 巻頭言	ささやかな日中環境協力の一齣から……………	2
■ 特別寄稿	「緑のカーテンプロジェクト・2011」の向うに見えるもの ……	3
■ 多摩川に学ぶ	みたか紫草復活プロジェクト……………	4
	多摩川で干潟体験学習 ……………	5
■ 多摩川散歩	トレッキング&ツーリング多摩川……………	6
■ 多摩川スケッチ散歩 (3)	……………	8
■ 私と多摩川	多摩川のタマちゃん目線で ……	10
■ 歴史・多摩川	橋の数より多い渡し場……………	11
■ インフォメ多摩川	……………	12
■ 財団からのお知らせ	2012年度助成研究募集 ……………	15

巻頭言

ささやかな日中環境協力の一齣から



一橋大学大学院
経済学研究科 教授
当財団選考委員

寺西 俊一

去る7月23日、中国の浙江省温州市で高速鉄道列車が追突・脱線し、多数の死傷者を出すという、まことに悲惨な大事故が発生した。この痛ましいニュースを見ながら、背筋が寒くなる思いがした。昨年（2010年）11月下旬、約1カ月前に開通したばかりの同高速鉄道（中国版新幹線）を利用して、上海市から嘉興市まで移動したことを思い出したからである。このところ、中国でも日本でも、各種の天災や人災に見舞われ続けていることに心が痛む。

ところで、この10年ばかり、私は、日本と中国のあいだでの多様な相互環境協力（日中環境協力）を促進していくことが重要になっていると考え、ささやかな取り組みを進めてきた（詳しくは、拙監修著『環境共同体としての日中韓』集英社新書、2006年刊、参照）。上述の高速鉄道に乗る機会をもったのは、その一環として私が企画した「地方環境ガバナンスと日中環境協力に関する嘉興ワークショップ」に出席する途上であった。このワークショップは2回目のもので、前年（2009年）9月にも同様のワークショップを嘉興市で開催している。今後も、現地を訪れる機会を得たいと考えているが、嘉興市は、上海から南西に約90キロ、長江デルタ地帯の中心部に位置する。日本人にはよく知られている有名な観光地・杭州と上海を結ぶ線のほぼ中間にあり、人口は約330万人。中国ではそれほど大きな都市とはいえないが、上海よりもはるかに古い時代から栄えてきた歴史的にも由緒ある古都である。私がこの嘉興市に何度か足を運ぶことになったのは、嘉興学院の杜歡政教授（同副院長、環境・資源経済学が専門）と知り合い、2008年11月に同学院を表敬訪問してからである。その折、同教授の案内で、嘉興市の地方政府（とくに環境保護局）が熱心に各種の環境問題への取り組みを進めていることを知った。

この嘉興市にとって、目下、最大の課題の一つがきわめて深刻な水汚染への対策である。中国では、1990年代以降、ますま



公園化されている嘉興市の水源池

す深刻化してきている河川や湖沼等の水汚染への対策が国家環境政策における焦眉の課題となっているが、そのなかで太湖流域は、国の重点対策流域の一つに指定されている。2002年頃から、農業用水にも適さないとされる「劣Ⅴ類」に相当する汚染水域の割合が急増し、2004年以降には全体の6割以上を占めている。2007年には、太湖でアオコが異常発生し、無錫市では上水道の供給を一時停止せざるを得ないという深刻な水汚染危機が発生した。すでに触れたように、嘉興市は長江デルタ地帯の中心部にあり、この太湖流域の下流に位置しているため、嘉興市民の飲用水源の深刻な汚染にどう対処していくかが緊喫の課題となっているのである。



嘉興ワークショップの会議風景、2010年11月21日

前述した「嘉興ワークショップ」では、こうした太湖流域で広がっている水汚染への対策として、近年、「流域生態補償」という新たな制度を導入するなど、いろいろな試みが進められていることが紹介された（ご関心の方は、私が編集を担当した「特集：中国の地方環境ガバナンス—その実情と今後の課題」『環境と公害』第41巻第1号、岩波書店、2011年7月号、を参照してほしい）。ひるがえって、多摩川流域もかつて深刻な水汚染が進行し、その対策に苦慮してきたという歴史がある。事情が異なる点が多いとはいえ、その経験のなかで、何がしか、これからの中国に役立つことはないだろうか。こうした日中環境協力といった観点から、多摩川流域における水汚染対策の歴史と経験を改めて検証してみる研究があってもよいと思われる。

特別寄稿

「緑のカーテンプロジェクト・2011」 の向うに見えるもの



緑のカーテンプロジェクト・2011
代表 小林 美知

3月11日、東日本大震災。原子力発電所の事故を目の当たりにし、私たちは節電のために何をすべきか？

2011年5月24日、『緑のカーテンプロジェクト・2011』の苗の配布日は、朝から雨だった。苗の配布会場となっている駐車場には、「先着1,000世帯にゴーヤとアサガオの苗を配布」の広報を見た市民の車が次々と入ってくる。車の列は途切れることなく、開始時刻から30分もしない内に受け付けの前に長蛇の列ができた。取材に訪れた新聞記者さんが「道路もびっしりですよ！」と驚きの声をあげる。苗と共に、リーフレットやネット、培養土も配布する。昼前には、3,000苗全てが配られた。



暑い夏がやって来る、どうする！？

震災後、私たちは何か出来ないかと話し合った。計画停電の不便さは身にしみていた。3ヶ月もしないうちに暑い夏が来る。たどりついたのが、植物で直射日光を避け、住宅の気温を下げる『緑のカーテン』だった。問題は苗の入手だ。種から育てるには経験がいる。種は買うとしても、きちんと育つ苗にできるのか。私たちは悩んだ。

相談に乗ってくれたのが、町田市営下小山田苗圃管理組合の、河野秀子さんだった。「緑のカーテン、いいじゃない。苗の数はどのくらい？」「5000苗です」「簡単よ！私たちは一年で80万本苗つくっているのよ！」土も、市販のものよりもずっといいものが作れるという。私たちは町田市環境資源部にこの話を持ち込んだ。「市民がボランティアで働きます！協働して、緑のカーテンに取り組みませんか？」

4月7日のことだった。

熱中症の予防、夏の計画停電対策は緑のカーテンで・・・！

市と市民協働の「緑のカーテンプロジェクト・2011」が立ち上がった。ゴーヤの種の提供は、町田市環境資源部（種は東京都市長会から配布された）。生ごみ堆肥の提供は、ごみ減量課が請け負った。公園緑地課は朝顔の種を提供してくれた。学校、福祉施設、保育園、学童クラブ…と、プロジェクトは瞬く間に広がった。町田法人会によるネットの寄付、地元農家による堆肥の提供もあり、一般市民にも苗を配布することにした。配布した苗は10,000余株。参加者は、個人・法人・学校等も含め3,000件にのぼり、町田市全域に広がっていった。

「緑のカーテンプロジェクト・2011」の向こうに見えるもの

種苗メーカーから苗を買って市民に配るのは、ものすごくお金がかかる。だが、町田市の緑のカーテンは、ボランティアで種から苗をつくり、苗を配った。堆肥を寄付してくれる農家があり、ネットを寄付してくれる法人がいた。ゴーヤの種は市長会からもらったもの。河野さんが楽しそうに言う。「こんな風にお金をかけないで、10,000株以上の苗を配って、緑のカーテンに取り組んでいる街なんてあるかしら？」来年の春、下小山田苗圃管理組合の駐車場に、市民の車がどんどんやってくることを、私は夢見ている。収穫し、大切に保管した、ゴーヤやアサガオやヘチマの種をもって。「緑のカーテンプロジェクト・2012」は、そこからスタートすることだろう。



多摩川に学ぶ

みたか紫草復活プロジェクト



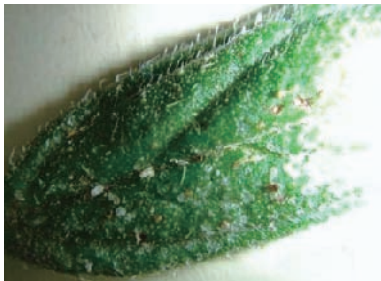
みたか紫草復活プロジェクト
会長 山縣 哲治

紫草（ムラサキ）は1,300 m位の山間の水捌けの良い斜面に生息する多年草の野草で、古来より薬草や染料として重用されて来ました。聖徳太子が制定した冠位十二階の一番上位の色が紫色で紫草の紫根から染料を取り染められました。また、花岡青洲の紫雲膏も紫草の紫根から作られました。このように古来より重用されて来た紫草が、現代では自生する姿は殆ど観察されず、絶滅危惧種に指定されています。これは乱獲と環境の変化によるものと考えられます。

本来、紫草（ムラサキ）は大変繊細な植物のため、自生するには紫草に合った環境でなければ非常に難しいのだと思います。土壌、水、空気が紫草の生長を左右します。

我々の会「みたか紫草復活プロジェクト」でも栽培していますが、現在のところ発芽率10%で発芽しても害虫や病気などで枯れてしまい、残るのは5%前後です。もっと目を掛けてやれば数値は上がるのでしょうか、現状では精一杯です。江戸時代に栽培されていた頃は紫草が高値で売買されビジネスになっていました。人の手を掛け大切に扱われていたので大量に収穫することができたのだと思います。また、その頃と現在の環境の違いも深く関わって来ていると考えられます。

紫草はアルカリ土壌を好みますが、現



アブラムシに犯された紫草の葉



種蒔き

在の土壌は放射能や酸性雨により酸性土壌に変化しており、水は水道水に変わり、空気も汚染が進んでいます。このような状況では紫草が自生するのは程遠く、栽培も難しい時代になっています。

それから、もう一つ大切な事は外来種との交配です。我々の会では和種の紫草を栽培していますが、西洋ムラサキと交配してしまうと紫根の色素が薄くなり、薬草としての価値もなくなってしまいます。西洋ムラサキは繁殖が強いので、和種の紫草を侵食して

しまいます。西洋ムラサキを紫草の近くで栽培していると虫などで交配してしまいますので、2~3km離さなければなりません。西洋ムラサキは和種の紫草と非常に似ているため、和種と間違えて栽培している方々がいらっしゃいます。和種の紫草の花は真っ白ですが、西洋は少し黄色がかって大きめです。また、発芽率も高く栽培が簡単なため、西洋と知っていながら栽培している方々もいるようです。それゆえに会としては、西洋ムラサキは絶対栽培しないよう充分注意して、和種だけを栽培して、保護しています。

このように紫草は大変栽培の難しい野草ですので、紫草が自生する環境作りが大切ですが、現代では殆ど不可能ではないかと思えます。紫草が自生しているところがあるとなれば、そこは過ぎ去りし昔のままの場所ではないでしょうか。



収穫紫根



2008 満開

多摩川に学ぶ

多摩川で干潟体験学習



多摩川クラブ
阿部 英夫

「カニのハサミは何で2つなの？」に、「ん〜カニもハサミが1つでは困るから」とは答えられず。

「貝殻の柄は何でみんな違うの？」に、「それは貝がオシャレだから」とも答えられず。

「ヘドロをつくりたい!!どうやってつくるの？」にも、「ヘドロはつくる物ではなく、出来ちゃう物」とも言えないような、子供たちから素朴な質問が飛び出し、大人には考えたことがない難問を突き付けられるのが、多摩川の河口干潟体験学習、別名ガタガタ探検隊である。

ガタガタ探検隊は7年前、私の母校の川崎市立東大島小学校で、当時の小林校長先生から多摩川学習を頼まれ？命令され？5年生の総合学習として始まった。子供たちの講師？遊び相手は、多摩川クラブのオッチャンたちである。多摩川クラブは代表で俳優の中本賢さんと、その賢さんに感化され多摩川で遊びはじめた、地元川崎区内の床屋仲間7名の市民団体だ。なので、床屋が休みの月曜日に年数回、子供たちを干潟へバスで連れ出す。



干潟はオッチャンたちの遊び場なのだが、ガタガタは遊びでなく学習なのだ。教室で多摩川の歴史や干潟を学び、もう一つ別な顔をみせる川の恐さも教えてから多摩川河口へ向う。遊びを学習に変えるのは先生の役割なのだが、教師とは何と大変な職業なのかと、あらためて感心させられる。



子供たちを干潟に連れ出すと、まずは泥との格闘になり、「ウワァー汚れるッ!!動けないッ!!靴が脱げたッ!!」の大合唱。初めは汚れるのに抵

抗があるようだが、帰りには「着替えはあるのか？そんなに泥だらけじゃバスに乗れねえぞ」になっている。いつの時代も泥遊びは面白いのだろう！

その学習に使う干潟は約400メートル。靴が脱げ泥にはまる子供たちを救出しながら、トボトボと干潟の説明をしながら歩くのだが・・・干潟には無数のカニが見え隠れしている。子供たちが足元に出るカニを無視できるはずがなく、心はカニに奪われ、ここではカニとの格闘をはじめている。オッチャンの一人よがりの干潟説明は、無常の叫びとなり、広い多摩川の空間に消えていく。「干潟ではカニに勝てないッ」、毎年同じ思いをしながらも、子供たちの笑顔に救われる。

干潟学習は「面白いッ、夢中になれる」から、学びの入口を見つけられるだけでも良いと思う。この開放的な空間で、それ以上子供たちに求めても、奥深い干潟の魅力には負けてしまうかもしれない。それよりも、環境が破壊され死の川と呼ばれていた多摩川が、今では子供たちの環境学習の場になっている。そんな喜びを万分の一でも子供たちに伝われば、それだけでやってる意義を感じられる。ただ、あと何年子供たちと多摩川に行かれるのか・・・多摩川で泥だらけになり遊べる。そんな「半ズボン」の心、いつまでもいつまでも、持ち続けていきたいものである。



チゴガニ



トビハゼ



多摩川散歩

■ トレッキング&ツーリング多摩川 ■

～多摩川をテーマとした体育実技の試案～



中央大学経済学部准教授
高村 直成

多摩地域に立地する中央大学に通う学生にとって、多摩川は身近な存在といえる。身近といっても、多くの学生にとって“見慣れた”という程度であることは間違いない。通学の途中、電車やモノレールが渡るあの川・・・立川、国立、府中、日野、多摩の各市を流れる中流域の多摩川の顔である。いうまでもなく川にはいろいろな顔がある。天候によって刻々と変化する表情もある。いつも何気なく眺めているが、きちんと目を向けてみると、自然環境、地域社会、歴史・文化など、一つの川から学ぶ事柄はたくさんある。

現在、「自然体験活動を野外教育的な視点で考える」というゼミを担当している。3年次には、一つのテーマを決め自然体験プログラムを立案し実施する。2010年度は“身近な川”多摩川に着目した。どうせ、かかわるなら源流から河口まで丸ごと体験してみよう、



水干

というのが私からの提案であった。

また、目指すアウトカムを“大学の健康・スポーツ実習（体育実技）の授業として開講”とした。活動は、多摩川 138km をいくつかの区間に分けて



むかしみち

一筆書きで順次踏破していくというもの。体育実技に分類されるが、テーマ型授業といって、実技という手段を用い幅広い教養及び専門性を身に付けさせるという複眼的な意図のもとに展開される授業形態を想定している。

行程を

- ①水干～丹波山温泉、
- ②丹波山温泉～奥多摩湖、
- ③奥多摩湖～川井、
- ④川井～登戸、
- ⑤登戸～大師

に分けた。各区間は日帰りの活動として終わることが出来るよう所要時間や交通手段を考慮した。下見の段階で計画書を作成し、スケジュール、実施にあたっての見どころ、コンビニ、トイレ、危険箇所、緊急時の対応等の下見の要点、必要な装備をリストアップした。

区間毎担当の学生らが計画を具体化し、本番となる。最初の集合は、山梨県塩山駅であった。ここから水干のある笠取山の登山口、作場平口へ向かった。登山の経験がほとんど無い学生には、多少きついと感じられる第一歩となったが、清らかな多摩川の源流にふれ元気をもって長旅をスタートさせた。初日



サイクリングロード

から直面した約25kmの長い道程は、彼らにとって非日常であった。水源地として守られた豊かな自然を体感するという主たる目的以外にも、こんな距離を歩き続けることが出来るんだという経験や、一定時間にどれだけ歩くことが出来るかという距離感覚を身につけるといふ副産物も生んだ。丹波山温泉からはバスで奥多摩に向かい、帰宅した。

翌日、丹波山温泉から再び歩き始めた。2日目の行程は、そのほとんどが舗装路で、渓谷を流れる多摩川との距離があったうえ、前日の疲労も残り、後にこの日が一番つらかったという感想を持った学生が多かった。

中一日挟んで3日目の奥多摩湖からは、奥多摩むかし道を歩き、奥多摩駅から先は、大多摩ウォーキングトレイルで、水に触れリフレッシュすることが出来た。

4日目の川井からは、レンタル自転車を利用した。羽村市のサイクリングロードまでは車道を走り、再び川と離れた。また、サイクリングロードに入ってから、移動中心となり多摩川はただの景色となってしまった感がある。そして、立川市まで来ると、景色は見慣れたものとなり、学生の口から「あ～、帰ってきた～」という言葉が出た。

最後の行程は夏休み明けに持ち越された。登戸から歩き始め、「伏流水を探る」をテーマに東名高速高架付近の湧水や等々力渓谷を見て回った。川崎の向河原付近からは、河口に向けてインフレーターカヤッ

クで水上を移動した。カヤックを漕ぐという行為も学生にとっては非日常で、はじめは真っ直ぐ進むことすらままならなかったが、次第にコツを掴み景色を楽しむ余裕も出てきた。学生らは、源流近くの澄んだ水の流れとは違い、流れをあまり感じる事の出来ないこの水面に足をつけることもためらっている様子であった。秋の斜陽は早い、約10kmの川下りの後、大師で上陸した。景色の一変するような河口を目指していた彼らにとっては拍子抜けしたようだが、無事に目的を達成することが出来た。

さて、この活動を通して学生達は、川が持つ変化を実感したと感想を述べている。上流域、中流域、下流域を個別に見るのではなく、源流から河口まで一つの繋がった川であるということ踏破することで改めて実感することが出来たのだろう。学生達が計画立案から実施まで幾度となく多摩川に足を運び、主体的なかかわりを持つことができた点は高く評価したい。授業として開講できるプログラムを目指すことについては、138kmを達成することが先に立ち多摩川との関係が若干希薄な部分もあったため、検討すべき点も多い。冒頭で述べた、自然環境、地域社会、歴史・文化などを多摩川との関係の中で学んでいくために、日数を増やしてでも、もう少し直接川と触れ合う機会を増やし、史跡、施設見学なども含めて内容的な肉付けが必要である。

ゼミとしてしばらくは多摩川とのよい関係の構築を模索していくことになるのだろう。



川下り

たまたがわスケッチ散歩 (3)

画と文 野尻明美 (のじりあけみ)

株式会社ジオテック 顧問

一級建築士、工学博士 (東北大学)

科学技術庁長官賞、紫綬褒章 受章

東急ハンズ大賞クラフトの部入選

「水彩スケッチと10の活用術」日貿出版社、
他技術書多数



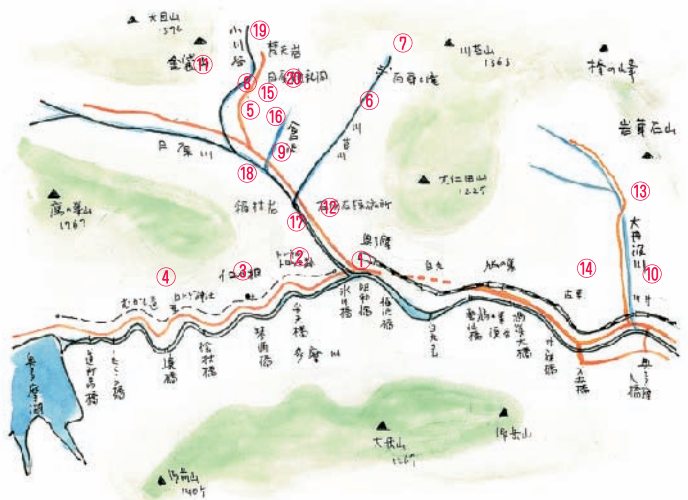
① JR奥多摩駅バスターミナルよりの全景 右は観光協会 左手前は食堂と土産物屋。関東駅百選にも選ばれた山小屋風の駅舎。むかし道もここから始まる。



② むかし道公衆トイレ むかし道は旧青梅街道。いわば生活道路ではあるが、今や奥多摩セラピーロードに指定されている。数寄屋造りの公衆トイレ、右にはサイカチ、左は赤松の巨樹。



③ むかし道楓の並木 新緑の時もきれいだが、秋の紅葉はさらにすばらしい。イロハ楓の巨樹の並木 左下に多摩川が流れている。



奥多摩町 日原川流域とむかし道

奥多摩町は第2回の奥多摩湖も町内にあるなどかなり広大でしかも全域が国立公園で多摩川の水源地という素晴らしい環境。巨樹・巨岩・鍾乳洞の里で自然の壮大さを感じながら町内を縦横に走るセラピーロードでのトレッキングを楽しむ。



④ 白髭神社の石灰岩断層 むかし道の中ほどにあり、断層面に擦れ跡を見ることが出来る。



⑤ 森林館 日原集落の中心 東日原バス停付近にあり日原が日本一を誇る巨樹の里の基地。



⑥ 日原川の支流川苔川 沢筋はセラピーロードに指定されている。



⑦ 百尋の滝 川苔川の源流にあり、部内では一番といわれている。



⑧ 鍾乳洞バス停と小川谷橋 深い谷を埋め尽くす紅葉はまさに綾錦。



⑨ 倉沢橋 鉛直に切り立った石灰岩の岩肌に張り付くようにかかる橋。水面からの高さは61mで部内では最高。



⑩ 川井八雲神社と神楽舞台 急傾斜地ばかりのこの地域独特の神殿造り。左の舞台の縁の下にある参道を登り右の本殿に礼拝する、その階段は自然の積敷となっている。



⑪ 金袋山 ミズナラの巨樹 鍾乳洞バス停より約2時間。急坂を登りつめた金袋山の中腹にあるミズナラの巨樹。なんでこんなに曲がっているのだろう？



⑬ 大丹波 輪光院のツガ JR川井駅付近より大丹波（おたば）川をさかのぼり集落を見守るように立つツガの巨樹。



⑭ 小丹波のイヌグスの巨樹 JR古里駅の北側の小丹波（こたば）集落の旧名主屋敷の裏にそびえる巨樹。



⑫ 向寺地のツクバネガシ 奥多摩駅より日原川を約20分さかのぼり、1軒だけある対岸の旧家の杉林の中にあるツクバネガシの巨樹が水平方向の枝を伸ばしているので画用紙は横一で描いた。



⑮ 水垂のトチの巨樹 バスの終点 鍾乳洞バス停の手前約10分、垂直の山腹の石灰岩を抱きかかえて立っている。



⑯ 倉沢のヒノキの巨樹 日原街道の倉沢橋を渡り右の山へ入ること約20分。樹齢1000年とも言われている神々しい倉沢ヒノキの巨樹。



⑰ 白妙橋 日原街道を登ってゆくとどうしたことが波打った床版の人道用つり橋 白妙橋がある。その裏山の石灰岩はロッククライミング練習用の岩場。



⑱ 稲村岩 バス終点の東日原より少し登ると山全体が1つの巨岩のような山がある。



⑲ 燕岩と梵天岩 バスの終点 鍾乳洞バス停から約5分 左に今般の大地震で一部崩壊したオーバーハングしている燕岩、右は梵天様のような梵天岩がある。



⑳ 天然記念物の日原鍾乳洞 かなり大きな洞窟であるが鍾乳石が発達しているところは新洞と呼ばれる洞内だけ。

私と多摩川

多摩川のタマちゃん目線で



東京都島しょ農林水産総合センター
振興企画室

前田 洋志

東京都では1983年以降、毎年、多摩川の稚アユの遡上数を把握するため、定置網による捕獲調査を行っています。この数年、アユの遡上数は100万尾を超えていました。今年はこれまでの30年近くの調査の中で最高の、783万尾の遡上数を推定しました。これは、多摩川に関わる多くの方々の努力の成果だと思えます。

そして、当のアユ自身の努力だとも思いません。このようなアユの遡上数増加に象徴されるように、多摩川的环境は毎年確実に改善されてきています。

私は多摩川でアユ関係の調査を行っていますが、調査の装備には必ずウエットスーツ（寒い時期にはドライスーツ）とマスク、シュノーケルを加えています。



タマちゃん

一般的には多摩川と言うと、水面から上の風景が語られています。が、私の場合、多くの調査で水中から多摩川を見ています。まず、調査

地点に着くと潜水目視調査から開始します。水中の多摩川は水面上の多摩川と一味もふた味も違います。

何の変哲もなく流れているように見える多摩川ですが、その水中には驚かされます。

場所にもよりますが、春から初夏にかけて、岸近くはコイ科魚類の仔稚魚があちこちに見られます。ある日、透明度の良くない水域で、ブラックバス類の産卵状況を把握するため潜水を行っていた時でした。川底ばかり見ていて、ふと顔を上げると、自分の体がコイ科仔稚魚で囲まれていました。まるで、イワ

シの群れのように、銀色の体を光らせて泳いでいるのです。一生懸命に泳いでいる彼らの顔を見て思わず、「大きくなれよ」と声をかけてしまいました。

透明度の良い水域では、まるで水族館の水槽を見ているようです。表層にはオイカワやウグイ、中層にアユやカワムツ、下層にムギツクやフナ類、そして石の間にはヨシノボリやシマドジョウなどが泳いでいます。場所によっては、ナマズやギバチの姿を見かけたり、上流では、ア



アユの稚魚



ナマズ

ブラハヤにヤマメ、カジカといったメンバーになります。

このような様子を見ていると、ついつい念入り(?)に調査をしてしまいます。潜水調査時間の大幅な超過が続き、とうとう、同僚に「お前は多摩川のタマちゃんか?」とあだ名まで付けられてしまいました。水に潜りたがる上に体形が似ているからかもしれませんが…。このタマちゃん目線で魚たちと共に流れる多摩川に触れてみると、問題点や課題が良く見えてきます。また、何をどうすれば良いのか、多摩川自らが語ってくれているように思える時もあります。今、多摩川のアユは多くの方々の注目を浴びています。ある意味、大都市に隣接した多摩川で毎年100万尾ものアユが遡上するのは奇跡なのかもしれません。アユを旗印に据え、河川環境の改善を行っていけば、きっと全ての生物にとっても良い環境になると思えます。調査研究を通じて、少しでも環境改善に役立っていきたいと考えています。



アユの遡上

歴史／多摩川

橋の数より多い渡し場



NPO 法人多摩川エコミュージアム
理事長 長島 保
(地域史研究家)

近世以前、大きな川を渡るには、渡し船に乗るほかはなかった。頻発する洪水で、架橋が困難だったからだ。多摩川も同様で、最下流の羽田の渡しを筆頭に、上流に向かって多数の渡し場が開かれていた。『多摩川誌』（京浜河川事務所企画）では、最上流の塚瀬の渡し以下、39箇所の渡しが紹介されているが、かつて私たちのグループが調査して、新たに判明したものを加えると、45箇所に及ぶ。

なんと中・下流（青梅市万年橋以下）では、橋の数よりも渡しの数の方が、多くなるのだ。近代以降に架設された橋の数を集計してみてもわかる。鉄道橋・自動車専用橋・水道橋などを除く、人道橋だけに限ると、27箇所になる。これは、河川によって地域が隔てられているように見えても、人びとは船を使ってたやすく対岸へ渡っていたことを示している。

近代になってから、各地で川筋を隔てて行政界が設定された。多摩川も下流域では、東京府と神奈川県境界線が、河身の中心線と定められた。正式には1912（明治45）年のことだ。これによって、旧来からのあばれ川・多摩川が生み出した飛び地問題が整理されて、治水対策に裨益した。だが、架橋の進捗とあいまって、渡船場の終焉があい次ぎ、いつしか対岸との交流は断ち切られていった。

いずれにしても、数ある渡しを使って流域の人びとは、いとも簡単に川を往来していた。いまでは想像もできない頻度で、川を越えた対岸との交流が行われていたのだ。いうなれば、渡し場は川筋の人びとの生活を支え、地域の交流を進め、物産の輸送に資するとともに、遠隔地の旅びとをも渡して、文化の伝播を促してきた。

さて、多摩川は江戸近郊の大河川という位置付けから、主要街道を通す渡船場が目につく。まず、著名な東海道の六郷の渡し〔図版①〕。同じ五街道の甲州街道をつなぐ日野の渡し。古来からの旧道だった中原街道丸子の渡し。津久井往還の登戸の渡し。大山詣で賑

わった矢倉沢往還の二子の渡し。しかし、その他多くの渡しは、作場渡しだった。対岸の農耕地に耕作に向かう農民らが利用した渡しなのだ。図版②の矢口の渡しは、夕暮れどき、川崎の農民一家が迎えの船を待っている情景が描かれている。1897（明治30）年の制作だ。



和田英作画「渡頭の夕暮れ」＝矢口の渡しを描く
(東京芸術大学蔵)

以前に、この矢口の渡しにまつわる聞き取りをしたときのこと。川崎市幸区古市場に住む女性（大正4年生まれ）が、対岸大田区旧今泉（矢口）から「文金高島田の花嫁衣装で、渡し船に乗って」嫁いできたと、語ってくれた。また、同席していた男性（昭和2年生まれ）は、対岸古市場（矢口）から婿養子に入ったが、渡しを使い、しばしば対岸へ農作業に出掛けたという。このように、「嫁取り」や「婿取り」は対岸同士でも行われ、冠婚祝儀の祝い歌だった羽田節は、川崎区の大郷地域でも歌い継がれた。また、新年の年占行事であるお美射の神事も、両岸に受け継がれている。かつて川は、決して地域を分断せず、川を挟んで地域は一つの文化圏を共有していたのだ。



六郷の渡し＝現存する唯一の写真か？
(大田区立郷土博物館蔵)

インフォメ 多摩川

多摩川流域の各種団体等の9月から12月頃まで行われる環境活動に関する主な行事・イベント情報を紹介いたします。

☆ 美しい多摩川フォーラム

- 美しい多摩川フォーラムの森（青梅）第2回植樹イベント（9月10日、青梅市柚木町）
- おおた商い観光展2011に出展（10月15日～16日、大田区産業プラザP i O）
- 京王クリーンキャンペーン共催（11月上旬、多摩市）
- 美しい多摩川クリーンキャンペーン月間（11月）
- 第3回多摩川子ども環境シンポジウムを開催（12月17日 昭島市フォレスト・イン昭和館）
（問い合わせ先） 美しい多摩川フォーラム事務局（青梅信用金庫 地域貢献部内） 担当：宮坂／土方／及川
TEL：0428－24－5632 FAX：0428－24－4646
E-mail：forum@tama-river.jp URL：http://tama-river.jp

☆ 財団法人 世田谷トラストまちづくり

- 野川せせらぎ教室～世田谷区成城四丁目付近の野川
（9月11日、11月13日 いずれも午前9時30分～11時30分 ※要申込）
- （財）世田谷トラストまちづくりビジターセンター「身近な自然と触れ合うミニイベント」～世田谷区成城4-29-1（野川沿い）
（原則毎月第2土曜日・午後1時30分～3時 ※要申込／TEL03-3789-6111）
（申込・問合せ）（財）世田谷トラストまちづくり トラストまちづくり課
TEL：03-6407-3311 FAX：03-6407-3319
財団HP <http://www.setagayatm.or.jp/>

☆ GeoWonder 企画 むさしの化石塾 「岸辺の楽校 日程」

- 8月27日（土曜） 栄町 化石採集会 多摩都市モノレール柴崎体育館駅改札10時集合
- 9月23日（金曜） 栄町 化石採集会 10時多摩川右岸現地集合
- 10月22日（土曜） 栄町 化石採集会 多摩都市モノレール柴崎体育館駅改札10時集合
- 11月19日（土曜） 栄町 化石採集会 多摩都市モノレール柴崎体育館駅改札10時集合
- 12月17日（土曜） 狭山丘陵 メタセコイア見学と狭山層見学 市民体育館前バス停10時集合
※参加費1,000円（資料代含む） 氏名連絡先 明記の上
（申込・問合せ） むさしの化石塾 福嶋まで（直前に内容の変更がある場合があります。）
携帯：090-1769-8020 FAX：042-567-1095
Web申込 E-mail：geo@extra.ocn.ne.jp までお問い合わせください。

☆ みずとみどり研究会 「地下水保全プロジェクトセミナー開催のお知らせ」

- 第2回セミナー・見学会 日時 2011年9月10日（土）10時～16時00分ごろまで
<見学会> 10時～
・見学場所 成城みつ池 他
・集合場所 成城学園駅改札（10時出発 時間厳守）
<セミナー> 13時～ *参加費 無料
・会場 トラストビジターセンター
（主催・申込・問合せ） みずとみどり研究会
連絡先 〒185-0021 東京都国分寺市南町2-1-28 飯塚ビル202
TEL/FAX 042-327-3169 E-mail：mizutomidoriken@ybb.ne.jp

☆ ガサガサ水辺の移動水族館／おさかなポストの会

○募集 平成 23 年度 9 月～

・ 出前授業・講演会・シンポジウム等

おさかなポスト 種の多様性と多摩川 地球温暖化と多摩川の水環境などを、紙芝居を用いた学習ができます。(小学生～高齢者 1～2時間程度)

・ 多摩川自然観察学習会

多摩川で魚採りなどを通して自然観察学習会ができます。(安全確保のためライフジャケットを着用しない人の参加はできません。)

・ ふれあい移動水族館

移動水族館で水辺の生き物を学びます。生きた魚にふれあい命の不思議と大切さを学びます。

学校や幼稚園、子供会などでお申し込み下さい。

ふれあい移動水族館は学校や幼稚園の他、環境イベントや自然学習イベントなどで実施できます。

日程や人数など下記メールよりお問い合わせ下さい。(実費のみご負担下さい)

○行事

- ・ 9月4日(日) JTB たびいく 多摩川教室：多摩川で泳ぎ、遊びます。詳しくはお問い合わせ下さい。(申し込み制 40名 有料)
- ・ 9月10日(土) 川崎市平和館 ふれあい移動水族館：来て見て触ってふれあい移動水族館 川崎市平和館
川崎市中原区木月住吉町33-1 (自由参加 参加費無料)
- ・ 9月10日(土) 小平市中央公民館 土曜子ども広場「友・遊まつり」ふれあい移動水族館：来て見て触ってふれあい移動水族館
小平市中央公民館 小平市小川町2-1325 (自由参加 参加費無料)
- ・ 9月11日(日) 多摩川自然観察会 (魚類・外来種・定置網編上げ体験)
14時～16時 多摩区稲田公園魚の家多摩川稲田堤付近多摩川でたも網で魚採り、外来種調査用に仕掛けてある定置網の網揚げ体験をします。川の中を歩きますので、胴長をお持ちの方は持参してください。または濡れても良い服装と靴(サンダル不可)が必要です。魚を捕る網や入れ物が必要です。胴長やライフジャケットのレンタルご希望の方は申し込み時にお知らせ下さい。(申し込み制 親子10組または20名 有料)
- ・ 9月17日(土) 生田高校 文化祭：来て見て触ってふれあい移動水族館 神奈川県立生田高校 (自由参加 参加費無料)
- ・ 9月18日(日) 生田高校 文化祭：来て見て触ってふれあい移動水族館 神奈川県立生田高校 (自由参加 参加費無料)
- ・ 9月18日(日) たまたま子育て祭り：来て見て触ってふれあい移動水族館 川崎市多摩区役所 (自由参加 参加費無料)
- ・ 9月19日(月) 投網体験教室：実際に多摩川でアユ漁を体験します。詳しくはお問い合わせ下さい。
(申し込み制 親子10組または20名 有料)
- ・ 9月22日(木) 川崎市幼稚園協会 子育てセミナー講演会「ガラスの地球 水と命を守る」10～12時
川崎市中原市民館ホール(武蔵小杉駅 徒歩3～4分) 詳しくはお問い合わせ下さい。
- ・ 9月24日(土) 川の日ワークショップ：国立オリンピック記念青少年総合センター (自由参加 参加費無料)
- ・ 9月25日(日) 川の日ワークショップ：国立オリンピック記念青少年総合センター (自由参加 参加費無料)
- ・ 10月1日(土) 足立区環境フェア：来て見て触ってふれあい移動水族館 足立区役所 (自由参加 参加費無料)
- ・ 10月2日(日) 足立区環境フェア：来て見て触ってふれあい移動水族館 足立区役所 (自由参加 参加費無料)
- ・ 10月8日(土) みなとまつり：来て見て触ってふれあい移動水族館 川崎市マリオン (自由参加 参加費無料)
- ・ 10月9日(日) みなとまつり：来て見て触ってふれあい移動水族館 川崎市マリオン (自由参加 参加費無料)
- ・ 10月9日(日) 第35回 日本死の臨床研究会年次大会：幕張メッセ 市民公開講座 12～13時
<http://www.jard35.com/> (自由参加 参加費無料)
- ・ 10月10日(月) 大田区 東調布スポーツまつり：来て見て触ってふれあい移動水族館 大田区東調布公園プール
(自由参加 参加費無料)
- ・ 10月15日(土) ENEOS子供フェスティバル：来て見て触ってふれあい移動水族館
JX日鉱日石エネルギー株式会社川崎製造所 (自由参加 参加費無料)

- ・10月16日(日) 多摩川親子釣り大会
餌釣り・ルアー・フライなど、どんな釣りでも楽しめます。必ずライフジャケットが必要です。レンタルタックルや胴長・ライフジャケット(有料)がありますので初心者でも参加できます。詳細やレンタル釣り具の必要な方はメールにてお問い合わせ下さい。別に遊漁券が必要です。(自由参加 参加費無料)
- ・10月22日(土) 多摩区民祭：来て見て触ってふれあい移動水族館 天然アユの塩焼き 生田緑地 (自由参加 参加費無料)
- ・10月22日(土) ゆるキャラ(R)まつり in 彦根：タマゾン君出演 (自由参加 参加費無料)
- ・10月23日(日) 大和市里親探し会：親探し会 カメの里親になろう！ (自由参加 参加費無料)
- ・10月23日(日) ゆるキャラ(R)まつり in 彦根：タマゾン君出演 (自由参加 参加費無料)
- ・10月29日(土) 川崎市立登戸小学校フェスタ：来て見て触ってふれあい移動水族館 (自由参加 参加費無料)
- ・11月4日(金) 川崎市民祭：来て見て触ってふれあい移動水族館 川崎市富士見公園一帯 (自由参加 参加費無料)
- ・11月5日(土) 川崎市民祭：来て見て触ってふれあい移動水族館 川崎市富士見公園一帯 (自由参加 参加費無料)
- ・11月6日(日) 川崎市民祭：来て見て触ってふれあい移動水族館 川崎市富士見公園一帯 (自由参加 参加費無料)
- ・11月6日(日) 神戸武庫川 講演会：市民公開講座 詳しくはお問い合わせ下さい。(詳細未定)
- ・11月13日(日) 多摩川秋のアユまつり 人工受精卵放流会と多摩川アユの試食会：多摩区稲田公園魚の家 (自由参加 参加費無料)
- ・11月19日(土) 多摩川天然アユ 産卵場観察会：多摩川天然アユが卵を産む場所を観察します。(申し込み制 親子10組または20名 有料)
- ・11月20日(日) 多摩川自然観察会(魚類・外来種・定置網編上げ体験)
14時～16時 多摩区稲田公園魚の家 多摩川稲田堤付近 多摩川でたも網で魚採り、外来種調査用に仕掛けてある定置網の網揚げ体験をします。川の中を歩きますので、胴長をお持ちの方は持参してください。または濡れても良い服装と靴(サンダル不可)が必要です。魚を捕る網や入れ物が必要です。胴長やライフジャケットのレンタルご希望の方は申し込み時にお知らせ下さい。(申し込み制 親子10組または20名 有料)
- ・11月27日(日) 多摩川自然観察会(おさかなポスト見学会)
14～16時 多摩区稲田公園魚の家にある「おさかなポスト」の見学をします。(申し込み制 親子10組または20名有料)
(問い合わせ・申し込み) ガサガサ水辺の移動水族館/おさかなポストの会 代表 山崎
メールアドレス RiverRanger777@gmail.com

☆ 多摩川源流研究所関係 秋のイベント

源流・緑のボランティア

- 主催 N P O 法人多摩源流こすげ・小菅村役場・多摩川源流研究所
- 協力 北都留森林組合小菅支部・多摩川源流大学
- 場所 小菅村内の民有林他
- 年間活動日(定員はいずれも20名・募集対象は16歳以上の健康な方)
 - 第1回 9月17日(土) 18日(日)
 - 第2回 10月8日(土) 9日(日)
 - 第3回 11月19日(土) 20日(日)
- 日程(1日目の昼食・飲み物及び着替え、タオル・雨具は準備してください)
 - 1日目 10時 JR奥多摩駅集合(送迎バス有) 13時～16時 除伐・間伐作業
 - 2日目 9時～14時 除伐・間伐作業 お箸づくり 14時半～小菅の湯で入浴 16時半 JR奥多摩駅解散
- 参加費 7,000円(保険加入・宿泊・食事その他含む)
- 参加申込先 N P O 法人多摩源流こすげ 0428-87-7055
この事業は国土緑化推進機構の助成を受けて実施しています。

多摩川源流第3回トレイルラン

- 主催 第3回多摩川源流トレイルラン実行委員会
- 場所 小菅村内の源流域
- 日時 9月18日(日)

財団からのお知らせ — 助成研究募集のご案内 —

多摩川およびその流域の環境浄化に関する 基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究・活動助成の募集

公益財団法人とうきゅう環境財団（理事長 西本 定保）は、1975年（昭和50年）より、多摩川およびその流域の環境浄化の促進や自然環境の保全などに必要な調査や試験研究を毎年公募してきています。その結果、これ迄に1,112件（新規・継続—学術研究700件、一般研究412件、13億1千万円）の調査・試験研究のお手伝いをさせて頂きました。

2012年（平成24年）4月からの助成についても、従来と同様、意欲的な調査や試験研究を募集致します。

1. 応募資格者

下記研究対象テーマに掲げた調査や試験研究に意欲のある方であれば、どなたでもご応募いただけます。

2. 助成研究対象テーマ

- ①産業活動または住生活と多摩川およびその流域との関係に関する調査および試験研究
- ②排水・廃棄物等による多摩川の汚染の防除に関する調査および試験研究
- ③多摩川およびその流域における水の利用に関する調査および試験研究
- ④シンポジウム、音楽会あるいは出版等による環境啓発活動や、歴史的な遺産あるいは社会システムの維持保全・回復運動等、多摩川及びその流域における環境保全や文化の創造に広く寄与するもの。

3. 応募方法

当財団所定の申請書に必要事項を記入、捺印の上、財団宛ご提出下さい。

「募集要項」「申請書」はホームページ上からダウンロードするか、200円切手同封の上、財団宛ご請求下さい。

<http://www.tokyuenv.or.jp/invite>

4. 助成の決定

2012（平成24年）年3月に開催予定の当財団選考委員会で選考のうえ、理事会に諮って最終的に決定致します。

5. 応募締切日 2012（平成24年）年1月13日（金）

6. 応募にあたっての注意事項

- ①ご応募にあたっては当財団の定める「調査・試験研究助成に関する調査・試験研究の選定基準、助成の方法、調査・試験研究の実施方法、助成金の支払い方法ならびに調査・試験研究者の個人情報保護の方法に関する規程」を必ずお読み下さい。
- ②過年度に不採用となった調査や研究の再応募は受付けておりませんので、同一の調査・試験研究課題で再応募される場合は、前回のものと調査や試験研究の内容のちがいがよく判るよう工夫して、申請書をご作成下さい。

（次ページへ続く）

7. 助成研究の種別と諸条件

研究の種別	学術研究	一般研究
研究の区別	環境問題改善のための調査や試験研究で、専門性が高く、その分野の学識経験を必要とするもの。 (財団のホームページで過去の研究事例をご参照下さい)	環境問題改善のための調査や試験研究で、一般の市民が、特別な学識経験を必要とせず取り組めるもの。
1件当たりの助成金総額の上限額	400万円	100万円
単年度の助成金上限額	200万円	100万円
研究期間	最長2ヶ年	最長2ヶ年
助成対象費目	直接研究に使用する器具备品で一個、又は一式10万円以上の固定資産。 調査や試験研究に用いる各種材料、部品、薬品等。 調査や試験研究のための交通費、宿泊費等。 調査や試験研究のために臨時に雇った人の謝金等。 器機・設備などの賃借料、通信費、その他。	
尚、一般研究については、従来からの調査・試験研究に加えて、シンポジウム、音楽会あるいは出版等による環境啓発活動や、歴史的な遺産あるいは社会システムの維持保全・回復運動等、多摩川およびその流域における環境保全や文化の創造に広く寄与すると思われるものも選考の対象といたしましたので、奮ってご応募下さい。		

「いきもののつながり」環境紙芝居 15のおはなし



絵：東郷なりさ

「いきもののつながり」制作プロジェクト
代表 下重 喜代

発行 サステナブル・アカデミー・ジャパン
E-mail : kiyo-sun@nifty.com

No.4 食物連鎖

植物は光合成により作りだされた炭水化物でできています。その植物を草食性の昆虫や動物が食べ、さらに昆虫は小鳥に食べられ、小鳥はオオタカなどの猛禽類に食べられます。

植物や動物が死ぬと、カラスやミミズなどが遺骸を食べて細かくし、さらにキノコやカビやバクテリアが分解します。分解者のおかげで、地上に死んだ動物がごろごろしていることもありませんし、枯れ木や落ち葉でいっぱいになることもありません。

こうして、動物や植物の遺骸は土壤の栄養となり、再び植物を育みます。このように、生態系の中で物質は姿や形を変えながら、消えることなく循環しています。

そして、この自然界の循環のすべての原動力が太陽エネルギーなのです。昔から太陽をお日様やお天道様と敬いつつ自然と共存してきた日本の伝統を誇らしく思います。

- 発行日 平成23年9月1日
- 編集兼発行 公益財団法人とうきゅう環境財団
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル8F)
TEL (03)3400-9142
FAX (03)3400-9141
ホームページ <http://www.tokyuenvironment.or.jp/>

